

シングル介護者の介護リスクに関する研究

性差と社会的規範の視点から

○ 星槎道都大学 氏名 大島康雄 (会員番号007695)

キーワード：シングル介護者 高齢者虐待 社会的規範

1. 研究目的

地域包括ケアシステムが導入され、住み慣れた地域で可能な限り生活できるシステムを構築することが望まれている。介護保険制度は、介護の社会化をキーワードに導入されたが家族への負担が大きく、脱家族化機能は不全状態である。介護保険制度では直接的な家族支援の機能が乏しく、デイサービスやショートステイなどのレスパイト機能や施設入所などの代替機能は想定されているが、在宅介護されている家族には直接的な支援は乏しい状況である。また、少子高齢化が進行し、サービス利用者も増加が予想される。住み慣れた地域における福祉力が問われてきている。介護予防・日常生活支援総合事業の導入もあり、フォーマル・インフォーマルを含めた社会資源の活用が求められるが市部・郡部の地域は多種多様であり、一様に地域福祉を推進するのは困難な状況である。

一方、高齢者の世帯構成にも変化が見られる。三世代家族は減少傾向にあり、核家族化から一人暮らし、夫婦世帯が大半を占め、独身の子どもとの同居世帯が増加傾向にある。経済状況の影響から晩婚化、シングル化する傾向であり、親が介護状態となると独身である子どもに介護役割が回ってくる状況となっている。家族介護の担い手として嫁から配偶者、独身の子どもであるシングル介護者に推移しようとしている。高齢者虐待の多くは息子によるもので、次いで夫、実の娘による虐待の順である。また、介護殺人・介護心中の多くも夫、息子によるもので家族介護には課題が残っている。本研究は、今後増えるであろうシングル介護者の介護リスクを整理することを目的としている。

2. 研究の視点および方法

本研究でのシングル介護者とは、現に独身であり離婚・死別などの過去に関しては問わないこととする。また、養介護者としては親を想定しており、他の続柄のものは本研究では除外をすることとした。想定しているストーリーラインとして、親が介護状態となり、独身であるために介護役割を担うこととなり、介護離職のリスクを抱えながら長期間の介護を行わざるを得ない状況となり、虐待や殺人などのリスクを抱えながら介護を続けるというものである。研究方法はCINIIで検索した論文から先行研究を整理していくこととする。検索としては、男性介護者、実子、性差、高齢者虐待、殺人、シングル介護者をキーワードとした。

3. 倫理的配慮

配慮が必要な場合には、日本社会福祉学会の研究倫理指針を順守している。

4. 研究結果

息子の介護リスクの整理を以下のように行いました。上田（2007）らは、介護者になっ

た理由に独身であることを挙げている。独身の息子と同居し、独身であるため身体的・精神的な支えが得にくい、高齢者虐待のリスクが高まることを指摘している¹⁾。独身で介護者になる過程で、介護者になる準備や同意、自らの気持ちとして介護者になるかが重要な点である。男性介護者としては、介護の効率化、ルーティン化を図り、仕事のように捉えるため女性と比べて身体的な介護ストレスを感じない特徴がある。しかし、人間関係及び社会関係は乏しく、社会から孤立している特徴があり、家事などが不得手なことや情緒的なサポートが必要なことが課題として挙げられる。湯原（2010）は、介護に生きがいを持ち、高い肯定感を抱く一方、「粗暴な性格」、「精神的に未熟、依存心が高い」の性格が虐待者の特長としてあげている²⁾。娘では、虐待の連鎖などが指摘されており、息子とは違った人間関係を形成することが特徴として挙げられる。宮田（2008）が行った調査では、虐待の世代間連鎖は、娘の方が多く、息子についてはあまり見られなかったと述べており、娘の親子関係の崩壊が虐待につながっていることを指摘している³⁾。高木ら

（2000）は、母親が娘に対する期待、感情として理解者、娘からの世話の期待、娘の人生への関与・介入、一心同体の因子を抽出している。また、夫の関係が悪いと娘が理解者であることを求める傾向があると述べた⁴⁾。息子、娘をベースにしてシングルである課題を整理すると虐待としては、介護役割の代替が少ないため、介護負担が重くのしかかる。介護ストレスについては、息子より娘の方が高く、虐待の発生率としては、息子の方が多い状況である。独身の息子は既婚者よりも虐待の発生率が高く、シングル介護者のリスクとして挙げることができる。特に注目すべき点はコーピングについてである。ストレス耐性を形成するためには、他者によるアドバイスや知識の獲得が必要であり、客観的な視点や距離感をもった関わりをもつことが重要である。

5. 考 察

息子による課題として、社会的な孤立から情緒的なサポートを受けにくい状況が把握できた。また、家事に不得手、性格特性が挙げられる一方で、介護効率やルーティン化による介護ストレスを軽減していることが把握できた。娘は、虐待の世代間連鎖が見られ、極端な親子関係が把握できた。シングル化するとコーピングする機会が乏しくなり、特に介護役割を担い始めた時期はリスクが高く、注意が必要であることが示唆された。

引用文献

- 1) 上田照子、荒井由美子、西山利政「在宅要介護高齢者を介護する息子による虐待に関する研究」（2007）老年社会科学
- 2) 湯原悦子「男性介護者による高齢者虐待 先行研究の到達点」（2010）高齢者虐待防止研究
- 3) 宮田菜奈子「介護における性差の問題と対策」（2008）日本老年医学会雑誌
- 4) 高木紀子、柏木恵子「母親と娘の関係一夫との関係を中心に一」（2000）発達研究